

## 審査の結果の要旨

氏名 元 勇準

本論文は、馬王堆帛書『周易』などの出土資料と經典化を経た後の古典資料を比較分析することによって、戦国から前漢初期の『周易』の原貌を復元し、それが儒教經典化する過程を明らかにしようとしたものである。全体の構成は六章からなっている。

第一章では、出土資料にみえる易の卦画・卦名などを分析して、戦国時代の『周易』は儒教經典とは関係のない占筮書であったことを明らかにする。第二章では、出土資料の「元亨利貞」の用例を分析して、初期の意味は儒教のいう四徳ではなく、「神が供物を受け取るので、万事が順調に行き、貞問するのに有利である」ことを意味する占筮の用語にすぎなかったと説く。第三章では、『周易』の中心概念の一つ「中」の意味の変遷について考察する。著者によれば、最初「中」は「中間」「途中」を意味したが、馬王堆帛書『易伝』易之義篇を経て通行本の文言伝・彖伝・象伝の段階になると、「中」は「中庸」「中道」を意味し、漢代にはいって「正中」「中正」の概念を中心とする爻位説が完成したという。

第四章では、『周易』の経文に現れる「言」概念に注目して、儒家が『周易』を取り入れた過程とその目的を明らかにする。儒家が『周易』を自派の学説に取り入れたのは、「不言の教」を説く道家の聖人より優位にある有言の儒家の聖人像を作り上げ、道家思想を克服するためであるという。第五章では、彖伝にスポットをあて馬王堆帛書の易伝と通行のそれを比較分析する。馬王堆帛書周易の二三子問篇・易之義篇・繆和篇には、彖伝と関連するとされる文章がみえるが、著者によれば、それらは彖伝と無関係か、それとも彖伝の原型に相当するものである。第六章では、『荀子』『礼記』『春秋左氏伝』の易関連の文章およびその引用を分析して、『周易』が儒教經典として定着する過程を明らかにする。

本論文で第一に評価すべきは、『周易』の經典化に考察対象を絞り、出土資料と古典資料の比較検討を通して、占筮書から易経への過程を解き明かしたことである。西漢末劉歆にいたる易学史とみても十分な説得力を備えている。第二に評価すべきは、出土資料に対する丁寧な検討である。最近利用可能になった出土資料を多方面に使用するのみならず、既存の釈文・考釈を参照するも、一字一句を新しい視点にもとづいて詳細に検討しており、日本の中国学の精緻な考証の伝統をよく継承しているといえることができる。

本論文は『周易』の經典化の過程の解明を目的とした結果、経学全体の分析についてはいまだ十分ならざるところもみられるが、所期の目的を達成しており、経学研究者に新しいビスタと視点を提供することができ、中国古代思想の解明に資すること大である。

審査委員会は以上にもとづいて、本論文が博士（文学）の学位に値すると判断する。